

# 國學院大學學術情報リポジトリ

## 中国における「端午」の菖蒲習俗の伝承について

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2023-02-07 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 李, 真 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.57529/00001639">https://doi.org/10.57529/00001639</a>

# 中国における「端午」の菖蒲習俗の伝承について

## The Inheritance of Shobu Custom in the Chinese Dragon Boat Festival

李 真

キーワード：端午 菖蒲習俗 伝承 薬物 霊物

关键词：端午 菖蒲习俗 传承 药物 灵物

### 要旨

周知のように、菖蒲は端午節との関わりが深い植物である。それにもかかわらず、中国の端午節に関する研究においては、菖蒲に着眼されるものが少ない。菖蒲はどのような理由で端午節と関連づけたか、東アジアの各国や地域はなぜ同じ菖蒲という植物を端午節の飾り物や行事食として選択したか。その裏に、端午節の特質または信仰的な要素があると筆者は考える。そこで、まず、菖蒲は一体どのような植物であるかを明らかにする必要がある。本稿は、菖蒲という植物に焦点を当て、類書等の文献記録で菖蒲に関する歴史的考察をすることによって、中国における菖蒲と端午節との関わり及び菖蒲習俗の伝承を検討することを目的とする。

### 摘要

众所周知，菖蒲与端午节关系密切。但是，在中国的端午节研究中，有关菖蒲的专门研究却不多见。菖蒲为什么会和端午节产生联系？东亚各国为何同时选择了菖蒲作为端午的装饰物和节食？笔者认为这些都与菖蒲自身的特质及其所蕴含的信仰因素相关。因此，首先有必要阐明菖蒲到底为何物。本文聚焦菖蒲这一植物，通过查阅类书等文献记录对菖蒲进行历史考察，在此基础上讨论中国端午节与菖蒲的关联及菖蒲习俗的传承。

### 序

一つの節供に、必ず代表的な植物が飾り物や行事食の形で関連してくる。周知のように、上巳に桃、重陽に菊と同じように、菖蒲は端午節との関わりが深い植物である。端午の植物といえ、まず菖蒲を思い出す人が多かる。菖蒲が端午の日に、邪気祓いや虫除けのような防疫措置や健康管理の目的でさまざまな用途に使われている。例えば、中国では、端午の日に、菖蒲と艾の束を門戸にかけ、

菖蒲酒を飲み、菖蒲湯に入るといふ習俗がある。日本でも、端午の日に、菖蒲や艾を軒下に挿す、菖蒲湯や菖蒲打ち等の習俗が伝わっている。菖蒲と端午節との関わりは、広く東アジアにおいて認められている。そして、菖蒲に関する習俗が国や地域ごとに変遷しながら伝承されてきた。

中国では、菖蒲と端午節との関わりについて古く年中行事の専門書や明清時代の地方誌に記載されている。しかし、端午節に関する研究においては、菖蒲に着眼されるものが少ない。植物学的な研究はされているが、菖蒲に関する系統的な考察はされず、端午節との関連づけについてはあまり論及されていない。おそらく、中国では、端午節を屈原を記念する日として強調されたため、研究内容も「競船」らの行事に傾いたためであろう。日本では、菖蒲に関する研究は、主に二種類に分ける。一つは、古代の歴史書や文学作品を通して、端午の時、宮廷や貴族階級に行われる行事を中心に菖蒲と端午節との関わりを検討し、大陸からの影響を受け、日本独自の行事内容に受容させたことを論じたものである。今一つは、「菖蒲葺き」や「菖蒲打ち」、「根合」の習俗に注目し、日本民間習俗の固有性を強調したものである。

上述の先行研究を背景にし、周星(2013)は「東アジアの端午-『薬物』を中心に」で、「『端午』をめぐる一部の民俗事象が無視されるか過小評価されて、見失われることもあり得る」と「一国民俗学」の立場の欠点を指摘し、「比較民俗学」の立場から「東アジア」という枠組みの中で端午を取り上げ、共通・共有される「薬物」文化を再認識する必要があると論じた。また、近年、端午節に関する研究において、薬物へ注目し、古代人の防疫意識やそれに伴う行為を検討する動きが見られてきた。特に、コロナ禍の中、「端午と文明生活」を主題とする2021年度嘉興端午学術研究シンポジウムが開かれた。端午節を「千年の歴史を持つ公共衛生防疫節」と位置付け、目下のコロナ対策と関連づけ、端午節に行われる防疫習俗の特徴やそれに含まれる精神を検討した。

東アジアにおいて、菖蒲は端午習俗の中で欠かせない存在である。それでは、菖蒲はどのような理由で端午節と関連づけたか、各国や地域はなぜ同じ菖蒲という植物を端午節の飾り物や行事食として選択したか。その裏に、端午節の特質または信仰的な要素があると筆者は考える。そこで、まず、菖蒲は一体どのような植物であるかを明らかにする必要がある。

本題に入る前に、まず、現在中国の江南地方における菖蒲を売る習俗について

述べておきたい。中国では、現在でも、端午が近づくと、野菜売り場で菖蒲と艾の束を並べて売る光景はよく見られる(写真1)。日本でも、端午の直前、菖蒲がスーパーの前で並べられている(写真2)。実は、早く宋の時代から、端午節に合わせ、菖蒲を売る習俗があったようである。宋の詩人方回は「午節」の詩の中で、「客里不知端午近、売花担上見菖蒲」という文句を詠んでいた。当時、花を売る行商人が担って売っていたのが分かる。『東京夢華録』でも、「自五月一日及端午前一日、売桃、柳、葵花、蒲葉、仏道艾」<sup>(1)</sup>と記載されている。北宋の時代、都の東京汴梁(現在の河南省開封市)で、五月一日から端午の前日まで、桃、柳、タチアオイの花、菖蒲の葉、艾が売られていたことを確認することができる。このように時空を越えて伝承されてきた習俗には端午節の意義が込められていると言えよう。

本稿は、菖蒲という植物に焦点を当て、類書等の文献記録で菖蒲に関する歴史的考察をすることによって、中国における菖蒲と端午節との関わり及び菖蒲習俗の伝承を検討することを目的とする。



(写真1) 筆者が住んでいる江蘇省常州市の野菜売場の様子。2021年端午直前に撮影。



(写真2) 2020年端午直前、東京の街頭、某スーパーの外にて撮影。

(1) 著者は宋の孟元老。北宋時代の東京汴梁城の社会生活を描写する著作である。

## 一、菖蒲はどのような植物か。

菖蒲はサトイモ科の歴史の古い植物であり、中国古代の文献上、「堯韭」「昌陽」等の別名が見られる。薬物として、菖蒲のほか、九節菖蒲や石菖蒲の名称も見られる。外形や名称が類似しているため、よく混同される。実は菖蒲、九節菖蒲及び石菖蒲は、下記の表1で現れているように異なる植物であることが分かる。

菖蒲と石菖蒲はいずれもサトイモ科に属し、漢方薬に使われているが、サトイモ科の異なる種類の植物であることが分かる。両者の適応症は一部が重なっているが、菖蒲より石菖蒲の適応症の方は明らかに範囲が広い。『図経』では、菖蒲は「不堪入薬用、但可搗末油調塗疥癢」と記載され、菖蒲を薬用にされなかったことが分かる。つまり、一般的に漢方処方に使われるのは石菖蒲のことであると言えよう。外形と香りから見れば、石菖蒲は「葉の幅が狭く、常緑性で、葉の中肋がはっきりしないことで」菖蒲と区別され、菖蒲は石菖蒲より芳香が強い<sup>(2)</sup>。端午節に使用される植物には強い香りを持つ共通点からすれば、門戸にかけられる菖蒲はこの水菖蒲のことであろう。石菖蒲の根茎がよく漢方処方の品種に入れられるため、菖蒲酒に使われるものは石菖蒲ではないかと推測される。しかし、古代の人たちは、植物に関する知識が今日ほど豊富ではなく、菖蒲を精確に区別したことがなかったのではないかと想像される。『図経』には、「今薬肆所貨多以兩種相雜、尤難辨也」という記録がある。『図経』は宋の学者蘇頌等によって、1058年から1061年にかけて編纂された本草学の著作である。上記の引用文から、宋の時代の薬屋では、菖蒲と石菖蒲を混じって売ることが多く、両者を区別することが難しい事情を確認することができる。上述の時代からほぼ1000年経ったが、現在、端午の習俗といえ、皆「菖蒲」という名称で統一しているが、実際に何の植物を使っているか、菖蒲に対してどのような認識がされているのだろうか。このような疑問を解くには、文献資料だけではなく、フィールドワークも必要であることを念頭に置かねばならない。本稿では、まず、菖蒲に関する文献上の記録を整理してみたい。

---

(2) “菖蒲” “石菖蒲” “九節菖蒲”. 富山大学和漢医薬学総合研究所民族薬物資料館 (民族薬物データベース). <https://ethmed.toyama-wakan.net/Search/View/432>, (参照 2021-11-20)

(表 1) 菖蒲、石菖蒲と九節菖蒲

名称	植物科名	植物名 (英語)	薬用部位	適応症
菖蒲 (水菖蒲)	Araceae, サトイモ科	<i>Acorus calamus</i> Linn	根茎	食欲不振、腹満、腹痛、下痢
石菖蒲	同上	<i>Acorus gramineus</i> Solander or <i>Acorus tatarinowii</i> Shott	同上	意識障害頭痛、不眠、狂躁、健忘、難聴、耳鳴り、癩痢、食欲不振、腹満、腹痛、下痢
九節菖蒲	Ranunculaceae, キンボウゲ科	<i>Anemone altaica</i> Fisch	同上	神経衰弱、消化不良、腹痛、リウマチ、痰

(データは民族薬物データベースより)

## 二、文献記録上の菖蒲について

参考文献として、中国史上最大の類書『古今図書集成』(故宫版)<sup>(3)</sup>のデータベースを用いることにする。「菖蒲」というキーワードで検索すれば、1300条余りの項目が出てきた。時代から言えば、菖蒲は先秦時代から近代に至るまで長い歴史を有する植物であると言える。その中で、「芸術典」医部彙考に入る漢方処方類が約500条を占める。中国古今の菖蒲や石菖蒲、九節菖蒲に関する処方では身体の部位によって分類・編集されている。その他、「歳功典」端午部、「神異典」神仙部、「職方典」(地方誌)等の中に編集されている。『古今図書集成』データベースから検索された内容を踏まえ、それに関連する古籍をも調べた。

文献記録を通じ、菖蒲の薬用の価値はもちろん、儒教や道教の影響で霊薬の面、そして、菖蒲と端午節との関連の詳細をも呈していることが分かる。以下では、「祭祀に供される菖蒲」、「薬物としての菖蒲」、「霊物としての菖蒲」及び「菖蒲酒」の四点に分けて菖蒲という植物の特徴を述べたい。

### (一) 祭祀に供される菖蒲

『周礼』の記載によって、菖蒲が周王朝の時、宗廟祭祀の供物にされた制度があることを確認することができる。『周礼』(天官)では、「醢人掌四豆之实、朝事

(3) 清の康熙年間(1662-1722)、陳夢雷が勅命によって、中国古今の図書から記録を抜き出して事項別に編纂した類書。正式名は『欽定古今図書集成』。全1万巻。中国最大の百科事典とも呼ばれている。本稿で使用されるデータベースは台湾の東呉大学と故宫博物館によって開発されたものである。全文検索できる。

之豆、其实韭菹、醯醢、昌本…(後略)」と記されている。周王朝の宗廟祭祀の時、供物としてニラの漬物、醢、菖蒲の根の漬物等が供されたことを意味する。ここの「昌本」について、鄭玄は「昌本、菖蒲根切之四寸為菹」と注を付けている。菖蒲の根を四寸ほど切って漬けたものは「昌本」とであると解釈された。「昌歌」「菖蒲菹」等の名称も同じものを指す。

先秦時代、菖蒲は祭祀用の供物だけではなく、国賓に供給される料理でもあった。『春秋左氏伝』では、「(僖公三十年)冬、王使周公閱來聘、饗有昌歌、白黑、形塩」という記録がある。紀元前630年、魯の国は、周天子が派遣してきた使臣を菖蒲の根の漬物で招待した。そのほか、『呂氏春秋』(遇合篇)や『韓非子』(難四篇)の中で、「文王嗜菖蒲菹」という文章が見られる。例えば、『呂氏春秋』(遇合篇)では、以下の文章が記載されている。

若人之於滋味、無不說甘脆、而甘脆未必受也。文王嗜菖蒲菹、孔子聞而服之、縮額而食之。三年、然後勝之。

文王が好む菖蒲菹を孔子が顔を顰めて食べた。三年経ち、ようやくその味に慣れたといわれている。前後の文脈から、菖蒲菹は甘くてサクサクと歯触りもよい食べ物であることが読み取れる。当時、菖蒲は天子や貴族に享受される食材であったと言えよう。

とにかく、先秦時代に、菖蒲は祭祀の供物や上層階級の食材として特別に扱われていたと思われる。その原因は、古代の人たちは、春に最も早く芽生える菖蒲の中に不思議な力が宿っていると思っていたためであろう。菖蒲は強い生命力を持っている植物である。『呂氏春秋』(士容論)では、「冬至後五旬七日、菖始生、乃耕菖者、百草之先生者也、于是始耕」と記述されている。この文章は四字熟語「瞻蒲勤耜」の出自となる。つまり、菖蒲が芽生えるのを兆しに、農耕の開始を勧めることを意味する。冬至は二十四節気の一つであり、西暦の12月21日-23日の間に当たる。その五十七日間後は2月18日-20日の間となる。旧暦で言えば、正月十五日前後になるだろう。万物が蘇る春となる季節に、菖蒲は他の植物に先立って芽生える。寒さにも強く、育てやすい植物として強い生命力を示している。

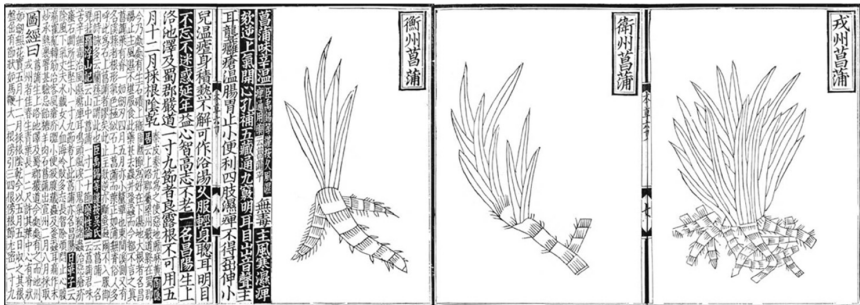


## (二) 薬物としての菖蒲

菖蒲の薬物としての効果も早くから発見された。これは『神農本草経』<sup>(4)</sup>の上品の部に記録されている。写真3の冒頭部の黒く塗られる太字の部分は『神農本草経』の引用文に当たる。それは、

菖蒲、味辛温、主風寒湿痺、欬逆上気。開心孔、補五臓、通九竅、明耳目、出音声。久服轻身、不忘、不迷惑、延年。一名昌陽。(句読点：筆者がつけた)である。「味辛温、風寒湿痺、咳逆上気を主治し、心孔を開き、五臓を補い、九竅を通じ、耳目を明るくし、音声を出す」のは明らかに菖蒲の薬物としての記録である。それに対し、後半の「久しく服すれば身を軽くし、忘れず迷い惑わず、年を延ばす」のは薬草を超える効果と言わざるを得ない。これについて、次の節で詳しく述べる。ここでは、「菖蒲」と表記されているが、実際に菖蒲と石菖蒲とのいずれかははっきりしていない。そして、その後の『図経』の引用文「今薬肆所貨多以兩種相雑、尤難辨也」によって、古くから菖蒲と石菖蒲とが混用されたことは明らかである。

『古今図書集成』のデータベースから検索された内容は、「芸術典」医部彙考に入る菖蒲の漢方処方類や民間療法が約500条を占める。これ等の処方や民間療法は身体の部位らや適応症によって分類・編集されている。菖蒲はさまざまな処方に使われたが、ここで、端午習俗と関わりのある「瘟疫」「目」「皮膚」の三点を取り



(写真3) (出典：民族薬物データベース、菖蒲『証類本草』より)

(4) 中国最古の本草書。1-2世紀頃作成されたと推測される。著者は不明。神農は古伝説上の帝王で、人々に医術と農耕を教えたという。原本が散佚し、『証類本草』等の中の引用文からその内容を窺えることができる。



上げて述べる。

a. 瘟疫について

「瘟疫」の項目において、「雄黄圓」という丸薬の由来や製薬法、付け方が記録されている。出典は『千金方』<sup>(5)</sup>である。「雄黄圓」は「雄黄、丹砂、菖蒲」らの十八味の薬品をひいて粉にし、蜂蜜で練り合わせる丸薬である。この丸薬は瘟疫に対応する薬物であるが、その付け方に注意してほしい。雄黄丸を絹の袋に入れ、男の人は左に、女の人は右に身に付ければ、山に入る時、虎や狼のような獣、蛇や虫を避け、河川に入る時、怪物、龍及び貝類を取り除くことができる。使用される薬品や付け方、目的からすれば、これは、端午節の「香包」を付ける習俗と類似している。

もう一つの例は石菖蒲を含む漢方処方「聖散子」である。煎じ薬である。「治一切山嵐瘴氣、時行瘟疫、傷寒風湿等症」とその適応症が附されている。

b. 目について

医学書によれば、菖蒲は目を明るくする効果がある。李時珍は『本草綱目』で、「柏葉上露、菖蒲上露、並能明目、旦旦洗之」と記述した。つまり、柏及び菖蒲の上の露で目を洗うと、目の病気が改善すると言われている。この類似した習俗が端午節の習俗として中国各地でかなり広い分布を呈している。また、『多能鄙事』<sup>(6)</sup>でも、菖蒲ら(4味)の薬品を入れた湯で髪の毛を洗うと体によく、そして、この湯で目を明るくできると記されている。

c. 皮膚について

『古今圖書集成』では、できもの等の皮膚に関する病気を治療する処方が数多く載せられている。例えば、「洗方拔毒湯」という処方があり、各種の瘡腫を悉く治療できると記述されている。また、「癰疽發背、生菖蒲末搗貼之、瘡乾者、為末、水調塗之」という治療法があり、悪性の腫れ物の治療方法が記されている。つまり、菖蒲を煎じた湯で洗い、或いは、菖蒲の粉末を水で溶かして塗るという方法である。これらの処方や民間療法は端午の菖蒲湯の習俗に影響を与えたと思われる。

以上のように、菖蒲が瘟疫、目、皮膚等の病気に当たる処方や治療方法に使わ

---

(5) 唐の孫思邈によって著した医学書である。唐代までの処方や治療経験を基礎に作成された。

(6) 明の劉基に編纂された類書である。全十二巻。日常生活の中で知っておく必要のある知識が収録されている。

れる事例を述べてきた。菖蒲の薬物効果は端午節の習俗や俗信と関連付けられている。例えば、菖蒲湯に浸かり、菖蒲を煎じた湯で目や髪の毛を洗い、菖蒲等の薬品を入れる「香包」等の習俗が伝承されている。

### (三) 霊物としての菖蒲

菖蒲は強い生命力を持つ多年生の植物であることをすでに述べた。この直感的なイメージの上、儒教の陰陽五行説及び道教の神仙思想の影響を受け、菖蒲は、その薬用効果が実際以上に評価され、霊草として信仰されていた。

まず、菖蒲と儒教との関わりについて述べる。文献上、北斗七星の玉衡星が天から降りて菖蒲に変わったという記録が残されている。例えば、『春秋運斗枢』には、「玉衡星散為椒為菖蒲」という文がある。また、『典術』では、「聖王之仁、功濟天下者堯也、天星降精于庭為韭、感百陰為菖蒲焉、今菖蒲是也」と記載されている。この二つの著作では、帝王の功德と関連づけられ、星が降りて菖蒲に変わったと叙述されている。漢代の儒家たちが盛んに提唱した陰陽五行説や天人相應の思想が裏付けられていることが明らかである。

そして、菖蒲と神仙思想との関わりについて論述する。後漢の応劭の『風俗通』は、「菖蒲放花、人得食之、長年」と菖蒲の長生きの効果を説いている。上述の『神農本草経』の「久しく服すれば身を軽くし、忘れず迷い惑わず、年を延ばす」のも菖蒲の長生きの効果を記すものである。また、道教の経典『道蔵経』（菖蒲伝）は、「菖蒲者、水草之精英、神仙之靈薬也」と菖蒲を神仙の靈薬に看做している。そのほか、菖蒲は仙人の伝説にも登場している。ここで『古今図書集成』から下記の五つの例を引用しておく。

- ①『列仙伝』：商丘子胥，高邑人，好牧豕，吹竽。年七十不娶而不老。邑人從之学道，問其要，言但食朮菖蒲根飲水而已。如此伝世三百餘年。
- ②『神仙伝』：興，陽城人，居壺谷中，無学道意，漢武上嵩山，忽見仙人言中岳菖蒲，服之長生。興聞采服之，不息遂得長生。
- ③『抱朴子』：韓衆服菖蒲十三年，身上生毛，冬袒不寒。
- ④『南方草木状』：菖蒲，番禺東有澗，澗中生菖蒲，皆一寸九節，安期生采服仙去，但留玉舄焉。
- ⑤『吳地記』：蔡経宅在吳県西北五十步，経漢人。有道術，煉大丹，服菖蒲得仙。今蔡仙郷即其隱処也。

この五つの事例は菖蒲（菖蒲の根）を服して長生きでき、或いは仙人となった伝説である。③の例はほかの事例と違い、菖蒲を十三年間服し、体に毛が生え、冬にはだぬいでも寒く感じないと記されている。菖蒲という植物の年を延ばす効果を力説している。①、②と③は神仙思想や養生術に関わり、神仙の道を説く著作である。霊草としての菖蒲には、道教の神仙思想や養生術の影響があることは明らかであることと言えよう。

#### （四）菖蒲酒について

「菖蒲酒」に関する記録が医学書や唐代の筆記小説の中で見られる。『千金方』では、次のような漢方処方が載せられている。「治好忘久服聡明，七月七日，取菖蒲酒，服三方寸匕，飲不至醉」である。物忘れの治療薬として、長く飲み続ければ、頭が良くなり、菖蒲酒を飲めば、お酒に酔わないという意味である。また、『本草綱目』では、「治三十六風、一十二痺、通血脈、治骨痿、久服耳目聡明。石菖蒲煎汁、或釀或浸」という菖蒲酒の効果が記載されている。『千金方』は唐の孫思邈が唐代までの処方や治療経験を基礎に著した医書であるため、おそらく唐代以前から「菖蒲酒」の処方が存在したであろう。

菖蒲酒の効果だけではなく、その作り方を載せる著作もある。『遵生八箋』<sup>(7)</sup>では、菖蒲酒の醸造法は下記の通り記録されている。

取九節菖蒲、生搗、絞汁五斗、糯米五斗、炊飯細曲五斤、相拌、令勻、入瓷坛、密蓋、二十一日即開。温服、日三服之、…（中略）服一剂、百日後、顔色光彩、足力倍常、耳目聡明、髮白變黒、齒落更生、夜有光明、延年益寿、功不殫述。

ここでは、九節菖蒲と明記されている。九節菖蒲を搗いて絞った汁を五斗、糯米を五斗、蒸米と麴を五斤、均一にかき混ぜ、磁器の甕に密封し、（発酵させ）二十一日間経つとできる。

医学書のほか、唐代の筆記小説『杜陽雜編』『滄浪洲』の話に「菖蒲酒」の言葉が見られる。「滄浪洲」の話は元蔵几という人は海に出かけ、誤って仙郷に入った物語である。この話では、元蔵几は滄浪洲の人に「菖蒲酒」と「桃花酒」でもてなされた。ここでまず、「滄浪洲」の話の冒頭部分を引くことにする。

---

(7) 明の高濂によって著された。明代までの養生学の集大成と言われている。

処士元蔵几，自言是後魏清河孝王之孫也。隋煬帝時，官奉信郎。大業元年，為過海使判官。遇風浪壞船，黒霧四合，同濟者皆不救，而蔵几獨為破水所載，殆經半月，忽達于洲島間。洲人曰：此乃滄浪洲，去中国已數万里。乃出菖蒲酒桃花酒飲之，而神氣清爽焉。…（後略）

元蔵几は隋の煬帝の命令を受け、判官として海に出かけた。途中で暴風に遭遇し、一人が生き残り、滄浪洲まで漂流した。出された菖蒲酒と桃花酒を飲み、気分が爽やかになった。その次は、長い紙幅を使って滄浪洲の豊かさ及び物産の珍しさを描写し続けた。結局、蔵几は故郷を懐かしく思い、中国に戻った。仙郷とこの世界との間に時間の差があり、隋の時代に海に出かけたが、戻ってきたのはすでに唐の貞元年代の末になった。二百餘年経ったわけである。最後に、この蔵几は隠居生活を暮らし、行方が世間に知られなかった。文中の描写から、「滄浪洲」はこの世を離れる伝説上の島であり、仙郷に相当すること可言えよう。菖蒲酒や桃花酒は仙郷の飲み物であり、人の精神状態を安定させる効果があるとされている。唐の時代、菖蒲酒や桃花酒が神仙思想と結び付いたものとなり、その時、菖蒲酒の効果及びそれに関する信仰がすでにあつたことを裏付けている。

ここまで述べてきたように、菖蒲は、古代では、いかなる植物なのか、それに関わる信仰等は分かってきた。菖蒲は寒さに強く、育てやすく、強大な生命力を持っている植物である。儒教や道教の影響を受け、神仙思想と結びつき、薬用効果を実際以上に評価され、靈草として信仰されていた。菖蒲に関する伝説もほとんど神仙思想に関わり、類似したものが多い。また、『古今図書集成』に載せられる「物産考」や「山川考」では、菖蒲の産地として「菖蒲」と名付けられる地名が多く、しかも仙人伝説と結び付いているものが多い。菖蒲の産地であるため、後に伝説を附会した経緯は明らかであろう。例えば、前掲の広東番禺の「菖蒲澗」と安期生の話はまさにこの類の記録である。これまで分析した通り、菖蒲の薬物と靈物との特徴は影響し合い、両者をはっきり区別して取り扱うのは容易なことではない。この相互関係は端午習俗の中でも現れている。では、菖蒲と端午とはいかなる関係を持っているか。『古今図書集成』の「歳功典」には端午の菖蒲習俗に関する事例は少なくない。次章で詳しく述べることにする。まず、『荆楚歳時記』の五月五日の条から見ていきたい。

### 三、菖蒲と端午節との関わりについて

本章で、まず『荆楚歳時記』の記載から菖蒲と端午節の関わりを考察し、そして、『古今図書集成』のデータを図表にし、菖蒲と端午節との関わりを論じる。

#### (一) 『荆楚歳時記』の記載から見られる端午の習俗

菖蒲と端午節との関わりについて、最も早く記録を残したのは『荆楚歳時記』であろう。南北朝時代の著作であるが、その以前から習俗が既に存在していたと推測される。現行本『荆楚歳時記』は、梁の宗凜の『荆楚記』を基礎に、隋の杜公瞻が注を加えた年中行事の専門書である。最初の荆楚地域の上、北の方の習俗も入れられ、範囲が広がった。これを通して七世紀の中国の歳時習俗を見ることができる。『荆楚歳時記』の内容を通じ、菖蒲習俗について菖蒲酒しか見られない。『荆楚歳時記』の「五月五日」の条では、次のような内容が記述されている。

五月五日、謂之浴蘭節。荆楚人並蹋百草。又有鬥百草之戲。采艾以為人形，懸門戶上，以禳毒氣。以菖蒲或鏤或屑，以泛酒。

この一段では、「浴蘭」、「艾の飾り物」、「菖蒲酒」の習俗が記載されている。この次に、杜氏の注が続く。殊に「浴蘭」について、以下のように注がつけられている。

按《大戴禮記》曰：「五月五日，蓄蘭為沐浴。」《楚辭》曰：「浴蘭湯兮沐芳華。」今謂之浴蘭節，又謂之端午。

古代、蘭は香ばしく、穢れを払う草とされたため、潔を求める時、蘭を入れて沸かした湯に浸かる習俗が行われていた。「浴蘭」は古くから伝わった「潔」（清める）の禮の一種である。端午は「悪日」とみなされ、一年中で疫病が流行る時期なので、特に「浴蘭」の必要がある。杜氏の注の中に引用された『大戴禮記』及び『楚辭』の文から、端午の「浴蘭」の習俗の例証となる。ほかに、『夏小正』では、「此日（仲夏の午の日、筆者が注をつけた）蓄采衆葉，以罽除毒氣」と記載されている。「蘭」と明記されていないが、「衆葉」の中に含まれただろう。五月五日に沐浴する習俗が重んじられていたことが分かる。しかし、この「浴蘭」の習俗は、先秦時代以降、一時期文献の中であまり見られなくなった。再び現れたのは南北

朝時代を待たなければならない。<sup>(8)</sup>

『荆楚歳時記』には、端午の飾り物として艾しか見られない。菖蒲は細かく切って酒に浮かべる、謂わゆる「菖蒲酒」に使われていた。杜氏は特別に「菖蒲」について注を付けなかった。

上記のように、『荆楚歳時記』の「五月五日」の条には、「浴蘭」、「艾の飾り物」、「菖蒲酒」の習俗は見られるが、菖蒲湯や菖蒲の飾り物等の習俗は記載されていないことが分かる。端午の名称も、時代によって異なることや、文献記録と現在の端午の習俗との間に差異があることは明らかである。それでは、端午の「浴蘭」の習俗はその後、なぜ「菖蒲湯」に入れ替わったのか。

端午の日付は、元々最初の午の日のことを指していたが、後に五月五日に決まったのである。つまり、最初に端午の日付は固定されたものではなく、夏至の日と重なる時もある。そのため、端午と夏至とは習俗が共通しているところが多い。「端午」という名称は「端五」より時代が古かったことが分かる。古代人は、旧暦の五月を「是月也（仲夏），日長至，陰陽争，死生分」（『禮記・月令』）の極めて「危険」な時期であると認識していた。禁忌が多い一方で、この大切な変換の時期に合わせ、争ってさまざまな方法でパワーを獲得しようとする。水や植物はそのパワーの源に当たる。いわば、端午の習俗には、消極的な習俗もあれば、積極的な習俗もあると言われている。前述の「潔」を求める「浴蘭」の習俗は後者に属する。

端午の「浴蘭」の習俗は、実は、古代だけではなく、近代まで伝承されてきた。それは明と清の方志（地方志）に載せられている。記録はそれほど数が多くないが、習俗は完全に消えてはいなかった。例えば、清代の広東省では、「五日浴女蘭湯」の習俗があり、広東省の「揭陽県志」にも、「…（前略）採百草湯以浴身，汲水貯之，謂之聖水，經久不敗」が載せられている。浴蘭とは明記されていなかったが、百草を採集してお湯に浸かるので、「浴蘭」の名残りがあると言えよう。蘭が入るか否かは関係なく、沐浴する行為自体はポイントである。やり方は前掲の『夏小正』と記述が一致している。そのほか、江蘇省如臯の地方志では、さらにはっきりと「浴蘭」の習俗が記されている。「端午採澤蘭煎湯沐浴，昔人謂浴蘭湯

(8) 『禮記・月令』や『夏小正』は中国古代の曆書である。『夏小正』は中国最古の農事曆と呼ばれている。『禮記・月令』は毎月の出来事や動きについて記した篇である。

者是也」という内容であった。

上古の「浴蘭」の禮は、後世になると、その変遷が見られる。沐浴するとき、清流に代わって井戸から汲み上げた井戸水でもできる。そして、蘭はほかの植物に入れ替えられるようになった。菖蒲だけではなく、桃や柳も使われていた。『瑣碎録』には、「五月五日午時取井水沐浴，一年疫氣不侵。俗採艾柳桃蒲，揉水以浴」という記録がある。また、『歳時什記』にも、「京師人以桃柳心之類，燂湯以浴，皆浴蘭之遺風也」という文章がある。沐浴に使われる植物は、いずれも疫病退散、邪気払いの機能を備えるものであるため、蘭に拘らず、現地の植物を選んできた。蘭に常に暖かく湿気がある環境が好まれるので、北の地域では入手しにくいことが想像できよう。しかも、蘭は春の植物であるため、夏に入手することができないのも現実である。

前掲の『証類本草』に引用された陶弘景<sup>(9)</sup>の「今乃处处有」のように、菖蒲の産地は北から南まで広がっている。つまり、南北朝時代から、菖蒲はすでにかかなり広い地域で見られる植物であることと言えよう。そして、『図経』は、菖蒲を採取する季節を「五月十二月」と記録し、特に「今以五月五日収之」と明記した。北宋の時、五月五日に菖蒲を採取する慣わしがあることは示されている。その上、道教の教えや菖蒲の薬物効果等の影響を受け、菖蒲湯は端午の習俗となりつつあったと思われる。李時珍は『本草綱目』で、「柏葉上露，菖蒲上露，並能明目，旦旦洗之」と記述した。つまり、柏の上の露と菖蒲の上の露で目を洗うと、目の病気が改善すると言われている。この類似した習俗が中国各地でかなり広い分布を呈している。そして、医書では、菖蒲はできものの治療にあたるので、五月のできものの多発の時期に、菖蒲は相応しい植物と言えよう。例えば、『本草衍義』<sup>(10)</sup>では、次のような治療経験が記載されている。

有人遍身生瘡，痛而不痒，手足尤甚粘，著衣被暍，夜不得睡，有人教以菖蒲三斗，日乾為末，布席上臥之，仍以衣被覆之，既不粘衣，復得睡。不五七日，其瘡如失，後以治人，応手神驗。

ここまで見れば、菖蒲湯は蘭湯に代わり、端午の代表的習俗に変遷した過程と理由を理解することができた。近代の端午の沐浴は、疫病退散という実用効果が

(9) 陶弘景(456-536)：南朝の道士、本草学者。『本草經集注』らの医学書を著した。

(10) 宋の寇宗奭等によって編纂された本草書。



重要視されるようになった。「浴蘭」の古禮は時代とともに変遷し、沐浴することを端午の要務にさせるだけではなく、お湯に薬草を入れて効果を高めることに、端午の正午の時に外かけて薬草を採集する習俗を派生しただろう。

## (二) 歳時記や地方志から見る菖蒲と端午節との関わりについて

菖蒲と端午節との関わりについて、『古今図書集成』のデータを整理して下記の二つの表で示す。表2は医学書や歳時記等の記録を整理したものである。表3は明清時代の地方誌からピックアップしてまとめたものである。

表2で現れているように、唐代の『千金月令』では、菖蒲習俗について、『荆楚歳時記』の内容をそのまま受け継いだ。宋代になると、歳時習俗を記録する歳時記が増えてきた。菖蒲習俗が以前より豊かになったことが読み取れる。例えば、菖蒲酒に雄黄を入れる習俗、菖蒲を人や瓢箪の形に刻んで身につける習俗、菖蒲

(表2) 医学書や歳時記に記載された端午の菖蒲習俗

出典	時代	習俗
『千金月令』	唐	<u>端午</u> 、以菖蒲或鏤或屑以汎酒。
『本草図経』	宋	五月五日、 <u>飲菖蒲雄黄酒</u> 、辟除百疾、而禁百虫
『歳時雜記』 (*『歳時広記』も参照した)	宋	端午、 <u>刻菖蒲為小人子</u> 、或葫芦形、帶之辟邪。都人以菖蒲、生薑、杏、梅、李、紫蘇、皆切如糸、入塩、曝乾、謂之百草頭。 以菖蒲、或鏤或屑、泛酒
『東京夢華録』	宋	端午節物…菖蒲、木瓜。並皆茸切、以香藥相和、用梅紅匣子盛裏。自五月一日及端午前一日、壳桃、柳、葵花、蒲葉、仏道艾。
『乾淳歳時記』	宋	市人門首各設大盆、雜植艾蒲葵花、上掛五色紙錢、排釘菓、粽。
『本草綱目』	明	五月五日午時、取蚯蚓糞、以麵和丸、如梧子大、朱砂為衣。可載熱瘡、每服三丸、無根水下、忌生冷、即止。 <u>或加菖蒲末</u> 、独頭蒜。
『酌中志略』	明	五月初一日起、至初五日止、… <u>門兩旁安菖蒲艾盆</u> …
『熙朝樂事』	明	端午為天中節、人家包黍稷以為粽。東以五色綵糸、或以菖蒲通草彫刻。天師馭虎象于盤中、圍以五色蒲糸…家家買葵榴蒲艾植之堂中、標以五色花紙貼画虎蠶。
『帝京景物略』	明	<u>漬酒以菖蒲</u> 、挿門以艾、…(簪佩)或五毒 <u>五瑞花草</u> …
『清嘉録』 (*蘇州及びその周辺の歳時習俗に関する著作)	清	瓶供蜀葵、石榴、蒲、蓬等物。 研雄黄末、 <u>屑蒲根</u> 、和酒以飲、謂之雄黄酒。又以餘酒染小兒額及手足心。隨灑牆壁間、以祛毒蟲。 <u>截蒲為劍</u> 、割蓬作鞭、副以桃梗、蒜頭、懸於床戸、皆以却鬼。

を含む多種類の植物が端午の節物とされる習俗（食べ物、飾り物）等があった。当時の大都市東京汴梁では、端午の植物を売る行商も現れた。その背景には、宋代の経済発展があげられる。この時、菖蒲とほかの植物を同時に飾り物として、門前の鉢に植えられた。これは後に簡略化され、門戸にかける習俗になっただろう。

明の時代はほとんど宋代の習俗を続けたが、「五毒五瑞花草」という名称が現れた。即ち、「蛇、さそり、ヤモリ、ムカデ、ガマ」の「五毒」及び「菖蒲、艾、柘榴の花、にんにく、サンタンカ」の「五瑞」である。この「五毒五瑞花草」は現在まで伝承されてきた。

最後の清の『清嘉録』では、端午の植物を使って生けた花、菖蒲雄黄の酒、ベッドや門戸にかけられた菖蒲等の飾り物という習俗が記録されている。邪気払いや虫除けのため、飲み残された菖蒲雄黄の酒を子供の額や手足に塗り、壁にまいた。飾り物として、菖蒲を剣の形に切られ、蓬を鞭の形に束ねた。この飾り物は鬼払いの目的で飾られていた。

明清時代に、地方志の編纂が盛んに行われていた。ここで、『古今図書集成』にある端午の菖蒲習俗に関するものをピックアップして下記の表3を作成した。表3で現れているように、菖蒲を飾り物として門戸にかける習俗は安徽省、浙江省、福建省、湖北省で行われていた。菖蒲酒を飲む習わしは最も広く分布している。菖蒲酒には、菖蒲酒、雄黄菖蒲酒、菖蒲蘄艾酒、菖蒲朱砂酒らの種類がある。菖蒲酒を飲む理由は、地方によって異なる。例えば、以下のような理由があげられている。

永平府：悪物不入口	福州府：延年
清河県：辟悪	濟南府：辟五毒
興化府：辟邪禳毒	寧国府：辟邪穢
江陵県：辟瘟気	

上記の目的はいずれも菖蒲の薬物や霊物としての効果と結びついている。

ただし、地方志に記されている習俗は、今日に至って、簡略化されたり、新しい習俗が加えられたりしたことを比較することができる。

(表 3) 明清時代の地方志に記載された端午の菖蒲習俗

地名	習俗
嘉定県	端午為天中節、…飲雄黄菖蒲酒、又遍噴門戸、墻壁間。
清河県、天台県、永平府、濟南府、兗州府、登州府、澤州府、南陽府、蘇州府、常州府、鎮江府、淮安府、池州府、鳳陽府、建昌府、衡州府、常德府、惠州府、高州府、雷州府、平樂府	飲菖蒲酒 & 飲雄黄菖蒲酒 & 飲菖蒲雄黄酒 & 飲菖蒲蕪艾酒 & 飲菖蒲朱砂酒
懷寧県、寧波府、台州府、衢州府、興化府、寧国府、漢陽府	以菖蒲艾葉懸門戸、飲菖蒲雄黄酒。
杭州府	家種葵花一本、旁植艾葉菖蒲、飲雄黄酒。
江陵県	端午、取菖蒲、生山澗中、一寸九節者、或鏤或屑、泛酒以辟瘟氣。
順天府	漬酒以菖蒲、挿門以艾、…（簪佩）或五毒五瑞花草…
瓊州府	飲菖蒲 & 采取菖蒲及百卉有芬氣者、浸水供餘飲浴…飲昌陽

#### 四、桃印朱索から菖蒲と艾の飾り物へ

前記の如く、端午という大切な変換の時期に合わせ、生活安定や生命力を保つために、さまざまな作法が行われていた。呪符のほか、さまざまな形の呪物が製作されていた。『続漢書』「禮儀志」には、「桃印朱索」に関する記載がある。

夏至陰気萌作，恐物不楙，其禮以朱索連葦菜，錘以桃印，長六寸，方三寸，以施門戸，代以所尚為飾，漢並用之。故以五月五日朱索五色印為門戸飾，以難止悪気。

上記の引用文は漢代の「桃印朱索」の由来を示すものである。夏至の日に悪気を払うことはこの禮儀の目的である。「桃印」は呪物の主な部分となり、「桃符」の変形ではないかと思われる。「桃符」は新年の呪物として使われていることは周知の通りである。桃の木で作られる呪物は端午にも使われ、それに朱索等の要素が付け加えられ、「桃印」という新たな名称が付けられたのではないか。漢代の人々、それまでの遺制を統括し、五色を採用し、「朱索五色印」を五月五日の門戸の飾り物とした。おそらく漢の以前からその先例があったことが分かる。そうすれば、この禮儀は相当古い歴史を持つことが想像される。

黄石(1973)は、「桃符」「桃印」「剛卯」は名称が異なるが、実は同じものであると力説していた。「漢以五日用朱索絡五色剛卯為門戸飾、以止惡侵也」という『続漢書』の注を例証にして上記の見解を述べていたが、筆者はその注の出自が見つからなかった。しかし、漢の時代に、朱索桃印が門戸に飾られる禮儀があることは事実である。これは桃符や剛卯を用いる目的とは共通しているが、利用期間が異なるので、呼び名や外形も当然異なるのであろう。

その後、さまざまな形の飾り物が作られてきた。例えば、端午に臂に付ける「百索」がある。名称も多様に表れていた。「続命縷」「五色糸」「條達」がその例である。これらの飾り物は、門戸の飾りから身につける飾り物と変遷してきたものである。虫や悪気の脅迫を防ぐため、身近に飾り物をつけることは次第に重要なやり方になってきた。

門戸の飾り物として、「桃印」は次第に菖蒲や艾の組み合わせに入れ替えられたと筆者が考える。邪気払いは依然としてその原義である。菖蒲と艾とは併用すれば、更なる効果を得るとされている。また、菖蒲を人の形に彫刻する地域もある。そのやり方もより強い効果を得ようとするしかないだろう。

つまり、桃印朱索はその後、二つの道に分けて変遷してきたと言えよう。一つは、身につけられる飾り物となり、今一つは門戸やベッドの傍に掛けられる菖蒲と艾の組み合わせとなった。もちろん、端午の時、菖蒲と艾のほか、桃は依然として使われている地域もある。それはやはり、桃の持つ邪気払いの霊力のためである。

## 結論及び課題

本稿では、菖蒲という植物に焦点を当て、類書等の文献記録で菖蒲に関する歴史的考察をすることによって、中国における菖蒲と端午節との関わり及び菖蒲習俗の伝承を検討した。前述した通り、端午に結び付く植物は、菖蒲より、桃印朱索(桃の木)、蘭湯(蘭)の方がより古かった。桃印朱索から菖蒲や艾の飾り物へ、蘭湯から菖蒲湯へ変遷してきたが、邪悪を避ける(疫癘を払う)目的は共通している。端午習俗の変遷の裏に、菖蒲という植物自体の持つ薬物と霊物としての特徴及び、儒教や道教の影響という要素が見られる。

本稿では、中国の類書等の文献だけを調べ、菖蒲と端午節との関わりを検討し

だが、日常生活の中の菖蒲と端午節の関わりや、それに関連する民間の俗信や習俗への調査に及ばなかった。地域に限定してフィールドワークを行う必要があると筆者が感じた。そして、本研究で得た結論を生かし、東アジアの視点から菖蒲と端午節の関わりを探究していきたい。

#### 参考文献

- 黄石 (1973) 「端午的辟邪法物」『端午禮俗史』(pp.145-150), 東方文化書局.
- 高濂 (2003) 『遵生八箋』(p.501), 甘肅文化出版社.
- 高誘 (漢); 畢沅校正 (1996) 『呂氏春秋』(p.228, p.464), 上海古籍出版社.
- 顧祿 (清) (1999) 『清嘉錄』(pp.104-108), 江蘇古籍出版社.
- 桜井満 (1993) 『節供の古典—花と生活文化の歴史—』雄山閣.
- 周星 (2013) 「東アジアの端午『薬物』を中心に」FIA 国際人類学フォーラム非覇権的人類学を求めて—文化の三角測量, 口頭発表.
- 尚秉和 (2002) 『歴代社会風俗事物考』江蘇古籍出版社.
- 宗凜 (梁) 著; 杜公瞻 (隋) 注 (2019) 『荆楚歲時記』(pp.44-45), 中華書局.
- 陳元靚 (宋) (2021) 『歲時廣記』中華書局.
- 陳修園 (清) 編 (2011) 『神農本草經疏』(p.33), 学苑出版社.
- 孟元老 (宋) 著; 王永寬注 (2010) 『東京夢華錄』(p.146), 中州古籍出版社.
- 李昉 (宋) 等編 (1995) 『太平御覽』(第四冊) (p.4421), 中華書局.
- 劉曉峰 (2021) 『時間与東亜古代社会』社会科学文献出版社.
- 魯同群注 (2011) 『礼記』(p.88), 鳳凰出版社.
- 楊伯峻編 (2018) 『春秋左伝注』(p.413), 中華書局.

